学校非公認・サバイバル部、時々、映研部

ハゲ☆ワシ♂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学校非公認・サバイバル部、時々、映研部

【Ｎコード】
Ｎ２４７９Ｅ

【作者名】
ハゲ☆ワシ♂

【あらすじ】
小さな頃から姉に振り回されて何度も死にかけた僕、そして高校でもまた姉のバカげた廃部寸前の部活に入部し、学校で死闘を繰り広げる。

球遊び編（前書き）

人生で人が死にかけるなんてそうあるものでは無い　だが僕、山本海夢は十五歳にして死にかけた回数数知れず　全ては無謀な姉のせいである。だから僕は高校では姉と決別を誓った・・・はずだった。

球遊び編

満月が淡く照らす暗闇の中
「ぜっ　前方より激しい攻撃がっ」味方の迷彩柄のバンダナを腕に巻いた兵が怯えた声で深紅のバンダナを巻いた人に言う　その人は悠然と立ち上がり何かを口に頬張ってから銃を構え壁に背を向け銃撃戦に参戦した。一直線の廊下で繰り広げられる銃撃戦は堂々巡りのように続くかと思ったが、前方の兵士が後方に向けサインを出した。後方のバンダナの人がまたサインを返した。それから１０秒もしない内に銃弾が飛んで来なくなった。敵の弾が切れた様だ　それから間髪を入れずに前方の兵士が隠れていた壁から飛び出て前にある壁に向け走り出した。さっきのサインは次の弾切れ時に敵の方へ詰めるというものだろう。足に自信があれば走れる距離だ　と思った。　しかし、彼は弾が切れ、今頃マガジンを取り換えているだろう敵の銃弾に撃たれその場に崩れ落ちた。誰もが予想しなかった事に味方は呆然としている。　だが、深紅バンダナの兵士はやはりという顔をしたそして　「ここは俺に任せて、お前は上の本部隊と合流しろ」と指示した。迷彩柄の兵士が、「しかし」と言い終わる前に深紅の兵士は「うるせぇ　ごちゃごちゃ抜かしてんじゃねぇ　早く行けぇ」と今度は強く言った。そして　彼は後ろに消えていった
「さぁ　これで二人だけだ。始めようぜぇ　楽しい死合いを」そう言い彼はマガジンを取り換えた。　ガチャッ、ガッチャ、　向こうも同じ様だ　それからカッカッカッ足音が近づいてきた。しかし、すぐ近くで足音は消えた。　そして静けさがもどった、瞬間右から黒い影が現れた　とっさに彼は今いた柱の面の横へ避けた。　しかしそこには銃を構えた女がいた。もうダメだと思ったが彼は一瞬で彼女が構える機関銃を自分の機関銃で弾いた。勢いのあまり彼は機関銃を手から離してしまった。すぐ彼女は弾かれた機関銃を構え直そうとした。　カチャ　だが彼はそれをさせない。彼女の懐に入る

彼の手には黒く輝くリボルバーが彼女の左胸につきつけられている。
「近距離戦になる屋内では拳銃『サイドアーム』を持つのは基本だが、まぁ今から亡き者になるので意味はないか。」　〔ドゥキューン〕　彼女は力なく膝から床に倒れた。　～Ｔｈｅ　ｅｎｄ～　ビデオはそこで終わった。　「は～い　おしまい　どう、わかったでしょう。私達の部活内容」　満面の笑顔でそういうのはこの映像研究部の副部長で俺を連れてきた姉　山本舞夢だ。　「ようは　サバゲー部でしょ。」見た内容そのままだ、だが「違～う　何を見てたの　はるちゃん教えてあげて。」そう言われたはるちゃんとはこの優男でビデオで姉を倒した男　五十嵐春樹だ。「え～っとね海夢くん　サバゲーと同時にこの映像を編集したのも僕らなんだ。」さっきのとは違う人みたい二重人格で深紅バンダナと銃を持つと変わるらしい、姉に一度聞いたと思う。「正直びっくりです。これが皆さんの作った物なんて」
「でしょ　お姉ちゃんすごいんだから」　「姉ちゃん一人じゃないだろっ　あっ五十嵐さん、さっきのリボルバー何ですか基本とかなんとか言ってましたケド」ビデオに出てきた意味不明なところについて聞く　「えっあぁ　うん　そうだね　まずあの銃は『Ｍ１９コンバットマグナム』って言ってＳ＆Ｗ社という会社のリボルバー銃なんだ」と春樹さんは照れながら言った。　「それってすごいの？」名前だけじゃ素人の僕には分からない。　「そりゃーもちろん　だからどうってわけないケド　ルパン三世の次元大介も使っていて　アニメに出るほどね」　んんーやっぱり素人には分からないでもアニメにでれるほど有名って事だ　「へぇ～、じゃあ、基本とか言うのは？」もう一つの疑問をぶつけてみる「うんっ　あれはね近距離だと銃身が長いマシンガンの場合小回りが効かないからサイドアームの方が有利になる場合があるんだ。」　まぁ確かに　実際ビデオでは拳銃が早く動き勝ってた。「あぁ　そうか」これは素人でもわかった。　「ってか　姉ちゃん話ってこれぇ」姉ちゃんに家庭が崩壊するかもって聞かされ来たのに　「違うわよ」いつになく

真剣な姉に自然と自分も真剣になる。・・・　「はぁー　知らねぇよ　てか校内でサバゲーしてる部活が潰されるのとか当たり前だろ」このデタラメな部活は今生徒会で潰すとか話があるらしい　平和で良いと思うが「いやぁー　ダメダメ　潰させないんだから　この部は私の第二の家庭よ　権力なんかに負けないんだから　私達と戦争しようなんて良い根性してるわ。」と言い何故か僕を見る姉ちゃん。「いやなんで僕？今から戦争でしょ　潰れる部に入るわけないじゃん」　廃部寸前の部活に誰が入るか　「ダメよ～　昔から私の右手としているあんたがいればどれだけの戦力ＵＰになるか」　昔から僕は近所のガキ大将だった姉に半ば強制的に使われよく怒られた。「だから嫌なんだよ　姉ちゃんの企みに参加して何度死にかけたか。三度は救急車に乗ったぞ。」　鉄橋からヒモなしバンジー、歩道橋からトラックの荷台に乗り移るとか、三台飛んだが四台めがなく看板にぶつかり後方車を回転してよけたんだぞ。俺何回死んだんだ。「だからこそ　その身体能力とタフさが必要なの　入部したらすぐ隊長ランクよ　特攻隊の」いいかもなぁ‥　隊長‼　良い響きだぁ　っておい　なんだよ特攻隊って死ねってか学校の戦争で入部後いきなり死を覚悟しろと言うのか「嫌だ　もう何度も死にかけたんだ。リアルジャッキーなんてもう御免だ」１５歳で怪我して死の淵何度をさまよった奴がどこにいる。　ガチャッキッキィー　そんな言い争いをしてると長身のスラッとした男子生徒が入ってきた「あっ葉矢斗先輩」姉がそういうと、はやとと　いう人は軽くお辞儀したどっかで見た顔だ・・

「こんにちは　この部の部長　柊　葉矢斗です」丁寧に自己紹介をしてくれた。「あっ　初めまして　山本海夢です。　・・・・あのう失礼ですがどこかで会った事ありますか　見覚えあるんですケド」ダメだ思い出せない。「んっ　君の記憶でだと・・・きっと新入生歓迎の挨拶のじゃないかな」えっ　僕の記憶？変な言い回しだな　それより新入生歓迎って　生徒会がやるんじゃないのか　「なんで葉矢斗さんが？　生徒会とかのやることじゃないんですか」そう聞

くと葉矢斗さんの右手をぐー・チョキ・パーと遊んでいた姉ちゃんが「あっ　葉矢斗先輩、生徒会長だから」と当たり前の様に言った。はっはぁい？　意味が分かんねぇ　敵の生徒会の会長と味方の部長が同一人物だなんて　頭の上にはてなマークを三個ほど浮かべてると目を閉じて僕達のやり取りを聞いてた、春樹さんが「だから　生徒会には今派閥があって会長派と副会長派に軽く別れてるの楽観的な会長と真面目な副会長は意見がよく別れて　運営とかは向こうがやってイベントとか行事はこっち側が提案してしてるんだ」丁寧に説明してるケドそんなのあり生徒会なんかに派閥とか政界じゃないんだからしかもなんで春樹さん説明ばっかなんだ。　「はっは　恥ずかしいことにね　まぁ、今日はもう遅いしこの辺にしよう急にこんなややこしい事理解しろ。だなんって無理だろ　家に帰ってゆっくり考えてくれ」　そうして騒がしい入学初日となった。家にかえると姉もうるさくは言わず「しっかり　考えてよね」と言い自室にいった　自分のベッドの上で頭の中を整理する　姉と春樹さん、葉矢斗さん達１５人で作ったサバイ部本当は映研部、副会長派の圧力によって今は生徒会の三人しか部員がいない、しかも三年生の葉矢斗さんは来年からはいなくなる　そんなサバイ部に副会長派は一年生三人を入部させなければ廃部を言い渡したそうだ。それで姉ちゃんが部員を集める＝［一人は僕］ということになったらしい、ケド姉ちゃんが生徒会なのは驚いた。もし俺が入ったとしてあと二人はどうすんだ・・・と考えながら僕は眠りについた。

・・・翌朝・・・　　ピッピ、ピッピ、目覚ましに起こされた僕は、『目覚ましに起こされながらもうこんな時間』とか言わないぞなど寝ぼけた頭で考えベッドから出た。・・・姉ちゃんが家を出て３０分後に家を出た。　学校まで約２０分歩いて校門に来た。

ザワザワ・・・・――なにも聞こえなくなる　ただ彼女、黒髪の女子生徒に見とれて、一瞬止まってしまった。彼女が見えなくなってから再び歩き出した僕は始業のベルまでに余裕をもって教室に入った。　ガラガラ、ガラガラカッ　　教室に先生が入って来てショ

ートホームルームを始めた。一通り話が終わると先生が「えぇー最後に、今日から、日直してもらう。今日は山田くん　それから柊さんなっ、今日は号令と閉じまりあと黒板消しだけだと思うから　よろしくなっ　はいおしまい」　　そういって担任は出ていった。マジかよ　なんで始め？番号順じゃねぇのかよ、んんそういえば柊って・・・・チラッ、隣の席の柊さんを見た・・・すると　ちょうど向こうもこちらを見て、目が合ってしまった。カァァ、顔が赤くなる。こっ校門で見た彼女だった。彼女は長い黒髪を耳にかける動作をしながら優しい笑顔の後軽く会釈をした。動けない自分、そんな僕を不思議そうに見つめる彼女、余計とおかしくなった頭で死にかけた時によく見た走馬灯が走る小さな頃、死にかけた瞬間がそして昨日の事・・・・ヒイラギ　ひいらぎ　柊　思考回路が意味もなくフルで駆け巡る。あっ柊　葉矢斗っ　こんな珍しい名前そう多くは居ない　「きっ君　ひっ柊さん　お兄さんいますかっ」　翔びそうな頭をお越し言うが緊張してかみかみながら尋ねる　すると彼女は　クスッと笑ってから「えぇ　今三年の兄がいるよっ　知ってるの？」と答えた　「えっまぁ、ちょっとね」「山田さんでしたっけよろしくね」彼女はそう答えた　キーンコーンカーンコーン　それから彼女とは何度か授業中目があった、というか僕がずっと見ていたから彼女が顔を挙げる度合ってしまった感じだった、しかし彼女はその度、微笑んでくれた。嬉しくって恥かしかった。しかしここにきて分かった事がある。休み時間毎にみんな新しくできた友達と固まって喋る中、僕にはまだ友達が一人もいない　昨日はずっと姉に廊下へ呼びだされて今日一人孤立してしまう形になってしまった。

　そして放課後全校放送で呼び出されサバイ部の部室にいった　するとなんと部室に柊さんが入っていったのが見えた。　僕も後から入った。するとそこには雑誌を読んでる姉ちゃん一人がいた　「姉ちゃんあんなのやめろよ」えっ、と今まで気付かなかったのか驚いた様子で「何がぁ」と聞いてきた　「だから全校放送なんてやめろよ　普通に呼びに来いよ」　「えぇ　めんどいじゃん」と姉と口論

してると部室の奥から柊さんが出て来た、すると「あっこっち、柊葉瑠夏。妹さんあんたと一緒、入部決まってるよ」　と姉ちゃんが軽く紹介した。「うん知ってる　ってか俺入るって一言も言ってないよ。」危ない流れで自然と入部させられるところだった。「えぇ　海夢さん入らないんですか」　と残念そうに葉瑠夏が聞いてきた。そんなのズルイだろと思いながら姉ちゃんを見るとこっちの心が読めてるかの様に笑っている　クソッ完全にやられた「いやっ　入るとも言ってないが入らないとも言ってない。」あんな事言われて断れるはずないだろ　「我が弟よ、よく言った。　お前は普通に学校ライフを送るような器じゃない。」そう言いながら姉はポケットからテープレコーダーを取り出した。なんて汚い人だ。人はここまで汚れられるんだな。と思う。「んじゃぁ　入部届け書こうか　はんこはお姉さんが持ってるから」はんこまで持ってるよ。　入部届けを書き終わる頃ちょうど　春樹さんと葉矢斗さんが入ってきた。「あっ　入部届け書いてくれた？」葉矢斗さんが聞いてきた。「あっはい」　「それからもう知ってると思うケド僕の妹も入るからよろしくなっ」葉矢斗さんが柊さんを軽く紹介した「あっはっぃ　いえっこっちこそ」柊さんの話をされ不自然に焦ってしまう。

「葉矢斗さん、そろそろ戻らないと。　舞夢も」時計を見ながら春樹さんが言う　「えっ　何だっけ？」姉ちゃんが聞き返す「ハァ　歓迎球技大会の打ち合わせだろ」呆れた様子で春樹さんが言う　なんか申し訳なくなる　「あっ、そうそう球技大会だ　早く行こう」まったく忘れてたくせにのりのりな姉ちゃん　「んじゃあ　今日は部活終わりな先に帰っていいぞ」部活から出ながら葉矢斗さんが言う。　「海夢っ　妹さん送っててあげて　帰り道一緒だから。」　姉ちゃんが帰ろうかと立ち上がった僕達二人に言う。　そして結局柊さんと帰る事になった。何を話せば良いか分からない。無言のまま１０分ほど歩いてから

「あっ　そういえば、葉矢斗さんが僕と会うのは初めてじゃないみたいなこと言ってたケド何か知ってる？」　　変な言い回しを

した葉矢斗さんの言葉について聞いてみる　「えっ、あっやっぱり覚えて無いですよね。」やっぱり何かあったみたいだ。　「うっうん　何なの？」まったく覚えてない　「えっとですね　何から話そう？」それから少し間が空いてから柊さんはゆっくり話はじめた。

「兄は中学時代　いろいろあって今みたいに生徒会なんかもしてなかったんです　元々兄は自然と人を引き寄せるのでたくさんの仲間がいて中学1年の時からすぐ大きなグループみたいなのが出来てました。　それで兄自身がタバコやお酒をしないので学校でのその様な問題はとても減っていて学校自体はよくなりました。

しかし中学3年の冬のある日、兄を盾に悪さをしてばっかいた長谷川って言う人が暴走族に喧嘩を売って近所の倉庫に監禁されるという事件がありました。　その時その人自体とあまり親しくもなくただの同級生でしかなかったケド兄は「自分の名前を出しているということは俺に助けを求めているんだ。」と言い、以前から嫌われていた長谷川さんをたった一人で助けにいったそうです。でも相手は８０人位の大きな暴走族で兄もそのまま監禁されそうになりました。そしてそんな時にその倉庫に来たのが、片手に木刀を持ったあなたのお姉さん、そして海夢さん貴方達二人だそうです。それまで兄とは何の面識が無かったのに舞夢さんは兄の仲間に『大きな者に隠れてダサい事してるのはお前らもだろー。』と一喝したそうです」

覚えている、いや今眠っていた記憶が甦がえってきた。

学校の途中に急に姉にただ喧嘩をするとだけ言われ町外れの倉庫に行ったことがある。　その日姉は急に僕の教室にやってきてそのまま倉庫に連れて行かれた。その倉庫には特攻服の男達とそれに取り囲まれて倒れている男、奥で意識を失っている男、それを見た姉は男達の中に走り込んだ。身構えている男達を姉は次々と木刀で切り倒していた。それに遅れてから僕も素手で男達に入っていった。僕が闘っていると姉がこちらに走ってきた。僕は何か言われた訳でも無いがしゃがむすると姉は僕の上を翔び僕の背後にいた敵を斬る僕は立ち上がる動作と共に群がる敵の集団に水面蹴りをお見舞いして

やる。姉と倉庫で２０分ほど舞うと敵はみんな地べたにうずくまって立ち上がらなかった。すぐ倒れている男二人を背負って倉庫を出た。　それから柊さんといろんな話しをしていたら柊さんの家に着いた。「あっ私　お家ここだから、今日は送ってくれてありがとう。じゃあ　さようなら」　「えっ　あっうん　良いよこっちこそありがとう楽しかったよ　じゃあバイバイ」そう言うと柊さんは笑顔で家の中に入っていった。　葉矢斗さんもそんな時期があっただなんて驚きだ。家も大きくて厳しそうだけど　でも逆に葉矢斗さんも人なんだなと思う。　家で夕方のニュースを見ていると姉ちゃん　が「球技大会、ボール当てに決まったわよ」そう言った。「ハァ～ボール当てって何よ」球技大会には相応しく無い競技名が姉の口から発せられた「いやだから　こうやって鬼がボールを当てる」一人でボール当ての説明をしようとする姉「違うよ　なぜ球技大会にボール当てなんだよ学校何名いると思ってんの　無理だよ」姉だけなら未だしも葉矢斗さん達もいた筈なのにどうしてこんなデタラメなのに決まったんだ「大丈夫です　春ちゃんと葉矢斗先輩がしっかり完璧な計画考えて時間も1日もらったし鬼は一クラスから男女一人ずつ当たったら鬼が増えていくし、しかも予算があるんだけどそのままだと一円も使わないから景品に回したから」さすが葉矢斗さん春樹さんやり手のビジネスマンさながらだ。「あっ、それから映研部はみんな最後まで生き残らないとダメだからね　ちゃんと生き残りなさいよ」姉は当たり前のように言った「えっなんで　生き残らないといけないの」と聞き返す　「当たり前でしょ　参加するからには死ぬ気で逃げなさいよ　何のために景品なんて準備したと思ってるの　それとも何　半端な気持ちで、球技大会舐めてんの」姉は鬼の形相で言う「いや舐めてるとかそんなんじゃなくて」姉に圧倒され言葉が出ない「いい　この球技大会で部活をアピールするの生き残りが全員映研部なら興味がわくでしょう　分かった」姉の言葉には何故か説得力があった。「わっ分かった分かったからそんな怖い顔で見ないで」小さな頃からあの顔にやられてきて体が記憶して

いる。「ついでに明日からは海夢６時に起きなさい　球技大会まで秘密の特訓するわ」そう言い残し姉は部屋に戻って行った。
朝５時半、ドンドン、ドンドン僕の部屋の戸を叩く音で起こされた。そして準備されていた姉特製の朝ご飯を食べて６時前家を出た。早歩きで１５分ほどで学校についた。グランドの脇に置いてあった籠いっぱいのボールを持ち校舎裏の空き地に連れてこられた。「それじゃぁ例の特訓始めるわよ」
そう言うと姉はボールを一つ取ると綺麗なフォームから豪速球を僕の少し右に　投げた。「うぉっ　危ねぇな特訓って何だよ」反射的に避ける
「ボール当てでの避ける練習追い詰められても生き残れる様にね今日から部活も海夢はこれだから　いくわよ次は本気で当てるわよ」
　ブォン　ボールが顔面目がけて飛んでくる、避ける、するともう一つ今度は下・・プァコーン　「うぐっ」休む事なく続くボールの嵐に籠が空になるまで１６回も時速１００超の球に当たった頃予鈴がなり地獄の特訓から解放された。アザだらけの体で教室に入るとクラスメイトの冷たい視線と驚いた顔の柊さんが飛んできた
「えっええ　海夢さんどうしたの？」顔に付いた泥を柊さんがハンカチで拭きながら聞いてきた　「あっうん　姉ちゃんと朝、特訓してきた」こんぐらいの傷かすり傷にも入らない。なのに本気で心配してくれる柊さん。女性にこんな風に優しくしてもらうのが初めてで感激し泣きそうになる　放課後部室に行くと姉が朝より大きなボール入りのかごを三つも用意して待っていた。「はい来たっ　これ持って朝と同じ場所に行くわよ。」それから僕は球技大会の日まで朝夕特訓してその他の時間は学校の隅々を探検して回った。そして遂に当日まるで僕に隠れる場所は無いと言わんばかりに晴れた空。僕は姉と共に家を出る　「海夢最初に言ったとうり死んだらだめよ」姉が僕に言う　「はっ　姉ちゃんこそ人の特訓ばかりして大丈夫なのかよ」人の心配する姉に言い返す　「おっちょこちょいの海夢とは別よ」そう言うと姉は生徒会の仕事に行く開会式が終わり鬼を取

り残し皆が散る。ある者はグランドに仁王立ちして、ある者は建物の影に隠れる　部員のみんなも何処かに消えた。僕は体育館の外階段の下に隠れる通路は三ヶ所あって壁を登れば階段に出れ見つかりにくいというやっと見つけた最高のポイントだ。始まってから１０分ほど鬼もそろそろ来るだろう　ガサッ、ガサッガサッ　誰か来た！　鬼かただの人か　相手が来る方からちょうど死角になる壁の裏で手鏡を片手に隠れる・・そして出てきたのは、春樹さんだった少し安心してからボールは持っていないと確認してから壁から出る驚いた春樹さんが声を出しそうなので一応口を塞ぎ羽交い締めにする「春樹さん　僕です驚かせてすみません　鬼じゃないです。」羽交い締めにした途端春樹さんに投げられそうになったので僕だと先に言う。　「いやー　驚いたな、まずここを知ってる人が居たのと急に羽交い締めにされたのとしかも相当慣れていて綺麗に決められたしね」それから近くにある石に二人で腰掛け暇潰しに喋る「いやっすみません僕も焦っちゃってつい体がヤバイって動いてしまって本当にすみません」いくらあの状況だったからって先輩を羽交い締めはないよなと思って僕は平謝りした。「いやっもう良いよ　本当にびっくりしただけだから」謝り続ける僕に春樹さんは言ってくれる。　「はい　ありがとうございます」すると「それよりここを知ってる人は少ないがその人が鬼になったらこんな良い場所誰かいると思い来るだろう。」　春樹さんが真面目に言う「あっはい　僕もそう思います　だからここは最初の数時間潰すためにいようと思ってますケド・・・」　春樹さんはずっと微笑んでいたが僕の言葉を聞いてからさらに声をだして笑った「はっはっはっは　君は舞夢に似ていると思っていたケド実は全然違うんだな　舞夢は作戦なんか全然理解してくれないのに海夢は作戦を話す前に理解するなんてこんなにも違うのかよ」　「あのー　今更なんですけどこの前見たビデオでなんで姉ちゃんはあんな早く攻撃してきたんですか」あのビデオでの気になる最後の点　「あーあれは簡単だよ　もう二丁機関銃を用意してただけ　それでマガジンを入れかえないで持ちか

えるだけだから早くなる　これで分かるかな？」春樹さんが尋ねてくる。「あっはい　もちろん分かりました　たったそれだけだったのか」　それにしても春樹さんは説明ばかりだな。　「そうかよかった。」　それから春樹さんとは姉の武勇伝とか馬鹿話をして暇を潰した。　２時間位たった頃から外が騒がしくなり僕らはおしゃべりをやめ警戒し始めた。すると通路の方から数人の足音が近づいてきた。しかも三ヶ所全部から後は階段の方に逃げるしか無いだが登っている間は無防備過ぎる生き残れる為には一人がここで引き付けていなければならない。誰が残るのかそれとも他に何か策は無いのか、春樹さんの方を見る、「海夢、お前は行け　分かってるだろ。俺の方が生き残れる可能性が高いだから俺が残る　さぁ行け　手遅れになる前にな　行けっ」　「分かりました。　春樹さん、生きてまた会いましょう。」そう言って僕は心の中で春樹さんに敬礼をして階段をよじ登った。すると校舎と校舎の間の屋根に出る　敵がいないのを確認してから下を見る。春樹さんは三ヶ所から飛んできたボールを軽くよけ正面の倉庫に跳ぶ様に登ったそして僕を確認すると親指を立て「また会おう」　と言い残し何処かに走って消えていった。それから鬼に見つかる前に渡り廊下の柱を登って校舎の屋根の上に隠れる。様子を見ようと下を見ると葉矢斗さんがいた。　校舎と校舎に囲まれた場所に俺は今いる　「はっはっは、　追い詰めたぞ　さぁ観念しな生徒会長さんよ～」明らかに素人では無いボールいっぱいのかごを背負ってる男は確か我校弱小野球部のエース『赤木剛憲』甲子園出場レベルでスカウトも来るほどの奴だ。　「くっくそ　ここまでか」覚悟する俺　「はっはっは　俺に目を付けられたのが最後だな」　スパーン、赤木が投げたボールが俺の後ろの壁に当たる　「なんてな、この程度であきらめる訳無いだろ　お前くらいじゃないと張り合いが無くて困ってたところだ〔ハリキリ王子〕さんよ」　赤木に嫌味っぽく言う　「おいおい俺が王子はねぇだろ　自分でも分かってんだ　ちくしょうだましやがって　だが状況はまだ変わって無いぜ　いくぞ喰らえ」赤木はかごの中のボー

ルを投げ始めた。「心柊流・刹那」俺は上半身だけでその時速１３０キロの球達を避ける。　赤木の手が止まる。　「どうした、もう終わりか赤木　所詮ただの野球部だな　俺はまだ足を大地から離して無いぜ」奴は本当はもっと強い、だが何かリミッターみたいのがかかってる。怒りで忘れさせようと赤木を挑発する。　「調子に乗んじゃねぇ　誰が終わりと言った　これからが本当の勝負だ」

続く

球遊び編（後書き）

すみません　分ける気はなかったけど文字数が足りませんでした。
次は終わらせます　　まぁ続編はあるけど　感想を書いてもらえれば幸いですというか書いて！！！

嘩亞怒遊び騙（前書き）

球遊び騙の続　待っていた人も待っていなかった人も必見
高校生がボール当て？　高校生だからこそレベルの高い超激ボール当てが出来る

「これからが本当の勝負だ」
赤木はそう叫ぶとまたかごからボールを取り投げ出した。「こちらも行かせてもらうぞ心柊流・影刹那」俺はさっきの技の発展技で影を残しながらボールを避ける。俺の残した影に一瞬戸惑った赤木だったがさすがの天性の運動能力で本物の俺を狙って投げてきた・・・・・・それから三十分後、赤木のかごからボールが消えた。「そっそんな、馬鹿な一球も当てられないなんて・・化け物か負けだ・・・俺の完敗だハッハッ、こんなに楽しい勝負は初めてだ。ありがとう」赤木は笑いはしたが、一球も俺に当てられず肩を落とした様に見えた。いや、こっちこそ楽しかったぜ　久しぶりに本気になって汗かかせてもらったぜ」そう言い俺は座り込んだ赤木に手を差し出した。その時、「いたぞぉ　みんなこっちだ」手を差し出した瞬間ほかの鬼に見つかった。「くっそ、いい勝負だった。んじゃあ」そう言って俺は踵を返して（きびすをかえして）、逃げた。　「すごい、すごいさすがだぜ葉矢斗さん」屋上から葉矢斗さんを覗いて俺は葉矢斗さんの闘いを見て思わず関心してしまう。　んっ、なにかおかしい　僕はそこで周りの異変に気づいた。　風向きが安定しない。それは極小の事だがどうでもいい事ではない。　下で身を潜めている鬼にバレていると言おうとしたがあっちから来ないなら最低限の体力で逃げる事ができる。それから僕は気づいていないふりをして向かい側の屋上の方に近づいた。距離として　約三メートル弱、これなら跳べる軽く後ろにさがり助走を付け屋根を蹴り宙を舞う。後ろを見ると屋根の影から隠れていたおにが僕を追おうと飛び出していたがもう遅い　地面に着地してそのまま土手を転がり降りた。僕が飛び降りたところにボールが雨のように降り注いだ　「あっあぶね」上を見るとまだ手にボールを持っている奴もいる、そいつらは目が合うとそのままボールを投げてきた。僕はボールをまた転がり避け

たそして立ち上がり前を見てみるとおにがこちらに向かい走ってきた。後ろを振り向くとこっちからもおにがきて挟まれた。　「ちょっちょっと、やっばいどうしよう」　走った勢いをそのまま使い、前と後ろのおにがボールを投げてきた。「よっ避けろ～」右　左　上　下と体を捻り、曲げ、跳ねて危機一髪でボールをなんとか避けた。「ふぅ～　特訓しといて良かった」肩で息をしながらもうボールを持っていないおに達の間を縫う様に走り校舎の影に隠れた。

～ピンポンパンポーン～「新入生歓迎球技大会・実行委員会からのお知らせです。残り時間三十分となり、生存者の数６人となりました。この人達は恐らく今日１日に数々の修羅場くぐり抜けてきた勇猛な武人ばかりでしょう。そんなあなた達にこの大会を盛り上げるために特別ルールをお知らせします。学校に設けたポイントにアイテムを置きました。最大限に活かし、より素晴らしい闘いが繰り広げられる事を期待しております。実行委員会でした。」　・・・（海）「どこまでむちゃくちゃな大会なんだ、アイテムってなんだよ、」　（葉矢斗）「喧嘩売ってんのか　俺のアイテムが棒切れかよ」　「おーいこっちだぁ、いたぞ、・・・はっはっは、生徒会長のアイテムが棒切れですか、笑えますね」　「バカにしないでほしい　私にとって棒切れは立派な武器だ　『心柊流・対複数棒術おろち』行くぞ」そのままおに達の環の中に入って行く。おに達に囲まれる形になりおに達は全方向からボールを投げてくる。だがそれらのボールは全て地面に落ち、柊　葉矢斗には当たらない。それどころかおに達は彼の振るう棒の餌食となりバタバタと倒れてく。（舞）「私の武器は何かなぁ～、マシンガンかなぁ～、ショットガンかなぁ～、おっ、」ポイントにあった箱を勢い良く開ける。中からは大当たり、実行委員である自分が入れたアイテム五個の内の１つ、脇差し付きの木刀『鵺殺し』が出てきた。「やったぁ　私、運いいこれがあれば、パーフェクト舞夢に四歩近づくわ。」自分の入れたアイテムが出てきた事でテンションが上がった舞夢は、「おーい、おに～こっちだよ　おにさんこちらっ、イェーイ」　ドタッ

ドタッドタッ、バタッバタッバタッっとおに達が集まってきた。「自分から位置を知らせるだなんてずいぶん舐めてくれますね」　「さぁ、これであと五人になるわけですね。喰らえぇ」ボールが全方向から飛んでくる。棒術なら弾けるが木刀では全方向は少し無理が有る。舞夢の姿がボールに包まれ一瞬見えなくなる。ボールがぶつかり地面に落ちる。そこには舞夢の姿がなかった。ただあるのは虚しく地面転がるボールだけだった。「螺旋鷹爪（らせんようそう）」上空からの舞夢の声におに達は上を見る。舞夢は上空から螺旋して降下しながら木刀で次々おにを斬り捨てた。（春）「あっあった。これか。んっなんだ」春樹が見つけた箱に入ってたのは英語のロゴの謎の瓶。「プロテインかな？疲れたし一応、貰っとこ。」プシュッ、キュッキュッ、グビッグビッ　プハァー、「なんかヒクッ苦かったにゃあ、ヒクッ」アメリカ産の栄養ドリンクかなんかと思い春樹が飲んだ瓶。春樹が飲みそのまま落とした瓶の端に書かれた『お酒は二十歳になってから』の文字。「ウオッと、アッと、あっれぇ足がヒクッふりゃふりゃするヒクッ」顔がみるみる内に赤くなる。すっかりでき上がってしまった春樹は「ヒクッおに～こっヒクッだよー」大声で叫んだ。その声を聞きつけたおにがぞくぞくと集まってきた。春樹の声で集まったおにはちどり足を見て余裕を感じボールを一人が投げた。「ウオッと」スカッ、おにが軽く投げたボールを春樹はふらつき避けた。「まっまぐれだ、まぐれ」おにの一人が言う。「そっそうだ、軽く投げたし」そう言い今度は本気で投げた。しかし、今度も外れた。「ちくしょ～なにも一人ずつ投げなくてもいいじゃないか。」外したおにがまた言った。するとそれに従い他のおに達が一斉にボールを投げた。春樹に向かい飛んでくるボールは全て紙一重で避けられた。そしておにが「くそっなんで酔っぱらいにボールが当たらないんだ」としかめっ面して言った。「なにぃお～ヒクッ、誰がヒクッ酔っぱらいだとぉヒクッ、」しゃっくりをしながら発言したおにに近づいていく。身構えるおに、すると春樹はおにの前でつまずき転びそうになる、おには反射的に手を前に出し無防備な状態にな

る。バシッ、転びそうになった春樹はギリギリの体制から足を前に出し踏みとどまり、逆に体重を乗せた形でおにのアゴに掌を綺麗に入れた。それを見た他のおにが「もっもしかしてあれって『酔拳』じゃない」と言い、他のおにも目を合わせて固唾を飲む、これからどうするかと　（葉瑠夏）「どっどうしよう　アイテムをとったはいいけど・・・これは」　葉瑠夏はおにに周りを囲まれていた。手に入れたアイテムは‥扇子‥葉瑠夏は　使えないわけでは無い、それどころか一番くらい得意だ。葉瑠夏が悩む点は素人に使えないと言う事だ。「心柊流・鉄扇、胡蝶乱」扇子を振ると突風が吹き敵を吹き飛ばす。その風による気圧の変化から光が乱反射して光が蝶が舞う様に見えとても幻想的だ。恐らく受けた人達は無事ではないだろう。そんな技を素人に使えるはずがない。優しい気持ちがいつも葉瑠夏という武術家を弱くしてしまう。葉瑠夏が悩んでいる間もおに達はジリジリと間を詰めてくる。その時、「おにさんこちらっ、イェーイ」「おに～こっヒクッだよー」舞夢さんと春樹さん？の声がした。おにも一瞬声の方向を見たがすぐにこちらを向き直った。「こうなったら、仕方ないね　心柊流鉄扇・胡蝶乱、十分の一っ」

葉瑠夏はそういうと扇子を慎重に振った。輝く蝶がおに達の一角に飛んでいくとおにが綺麗に飛び上がりそのまま地面に落ちた。おに達自身に大きなダメージは無い様だが葉瑠夏の技を見たおに達は放心状態で呆然と立ち尽くしていた。「さぁ、次は本気でやります。今度は誰が飛びますか。貴方それとも貴女？　十秒数えます、残っていた人は飛ばして差し上げます。　いーちっ」葉瑠夏がおににそう言うと、ズダッズダッズダッ、一秒数えただけで一人残らず走り去った。闘わずして勝つ。武術家として一番良い闘いをした葉瑠夏だった。（海）　「まったくなんて馬鹿げてるんだ。ボール当てにアイテムなんか無いだろ。フツー」姉の考えた大会に愚痴を吐いていると、「あっ、アイテムの箱だ。どうせなら一応見てみよう。」いつの間にかアイテムのポイントの前に通り掛かったのでアイテムを開ける事にした。「何が入ってんだろう…」少し興味も持ちなが

ら恐る恐る箱を開けようとしたその時、「あっ、いたぁ～　皆ぁ～こっちだ。いたいた」　一人のおにに見つかり他のおにを呼ばれてしまいおにが圧倒的に多いのですぐに囲まれた。もうおには今にもボールを投げ出しそうだ。「やっぱ、この状況を打開するにはアイテムにかけるしかないかな。」頑張ればこの場はなんとかなるかも知れないけどおにはまだまだ増えてきては体力が持たない。「あっアイツ、アイテムを取りだそうとしている」一人のおにがそう言いボールを1つ投げた。僕は箱を抱えて横に転がった。それから体制を立て直し箱を開けた。…箱には四角い小さなケースが入っていた。それは何度も見た事がある。「トランプ」だった。「はぁー、コイツに賭けてたのに、トランプだなんてあんまりだ。」なんでよりによってトランプどう使えばいいんだよ。「ぷっはははは　おい、アイツのアイテム、トランプだ」バカにしながら一人のおにが言う。「なんて運の無いやつ。だが遠慮なくいかせてもらう。」おにはそう言うとボールを1つ投げた。僕はもうすでにコイツに賭けたんだ。できる限りの事はするさ。僕はトランプを一枚取り飛んでくるボールに投げた。…『ピキンッ』綺麗にボールが空中で真っ二つに割れた。　ビビり後退りするおに達、自分でやり自分に驚く僕。…「おい、てめぇら　誰が運がないだと、誰がかわいそうだって　俺はてめぇらの方がかわいそうだぜ。」一瞬間が空いてからビビるおに達に言う。「だっ大丈夫だ。相手は一人で投げる一斉に投げたら間に合いはしない。皆投げろ。」おには一斉にボールを投げてきた。おにの手からボールが離れる前に何個かカードを投げるそして俺のところにはボールが1つも飛んで来なかった。「私には見えなかったぞ　やっ奴は、鬼だぁ」俺の中で今まで眠ってた鬼が起き始めた。「さぁ覚悟はいいか　生まれてきた事を後悔させてやる。死にたい奴から来い。」体が無意識に動いていた。僕はトランプを手に構える。おには暫く動かない。「どうした。そっちから来ないならこっちから行くぞ。…行くぞ。死ねぇ～」　おに達の間をすり抜けながらトランプでおに達を倒していく。おに達は逃げようとしたがもう

遅い、後ろを向けたおには倒れ動けずにいたおにも倒れ、おにが四五十人いたそこには鬼一人だけが立っていた。何故か不思議な感じ、自分が戦っているのに何故だか僕は見ているだけのような感覚だった。本当に鬼が僕に乗り移ったのかもしれない。辺りを見渡す。だが倒れているおに以外誰もいない。　いや一人校舎の陰から現れた。誰だそいつは男だった。その男はこちらに歩いてきた。トランプを構える。「君が山本海夢か…おっと、失礼私は生徒会副会長・佐藤（さとう）一（はじめ）と申します。以後お見知り置きを、」細目の男はそう自分の自己紹介をした。副会長と言えば、映研部の最大の敵。「こちらこそよろしく。それで『一』さんはおになの、ボール持ってませんケド。」敵意をビンビン感じながら意味の無い質問をする。「ボールが無くても海夢君を捕まえればいいんだ。」そう言うと木刀を取り出した。「逃げ手が武器可なのだからおにも勿論いい。そうだろ。」嬉しそうに笑う『一』「そうなんですか。じゃあもう他のみんなも、」こっちは一人だが他の人は武器を持ったおに達にやられたかもと心配したら「他人を心配する余裕が有るのか。しかもトランプが武器なんてまるで道化師だな。なめられたもんだ。まぁ良いや、大丈夫だよ、きっと持ってるの私だけだから、行くぞっ」そう言うと一気に間を詰めてきた。だが構えはほぼ無防備、僕はタイミングを合わせて『一』のアゴにクロスカウンターをキレイに入れた。渾身の力で撃つ時は強い人ほど強い力で前に踏み出すので普通なら今のは立ち上がれない。だが相手は副会長、見た目や動きからして武術をしている。もしかしたら今のはわざとかもしれない。僕は弓道の心得どうり（経験なし）に残心をした。そして後ろを向こうとした時、指先が動いた。『佐藤一』は立ち上がりこちらを見た。「さすがに今のは効いた。なめてたのはこちらもだったみたいだ『道化』。だがこれでおあいこだ。次は倒す気で行くぞ。はぁぁぁぁ」『一』は、一気に間を詰めてきた。ヒィュン、横払いそれを飛んで避ける。フゥンカキッ、休む暇なく縦斬り、僕は空中でそれをトランプ二枚で受ける。すると無防備な腹に蹴りが容赦なく飛んできた。ザッガッ、

ザッザァー、「うっ、くっくそ」豪快に蹴り飛ばされ立ち上がる。「ふっん、なんと無防備な立ち上がり方だ。それでも山本舞夢の弟かっ。まぁ最強の『素人』、しかた有るまい。」そう言われ脇腹を押さえながら奴を睨もうと前を向く。だがそこには奴の姿はなかった。ブン、ボコッ、ガッ、ゴロゴロ、今度は横から木刀で飛ばされる。「私の姿さえ捉えられんか『道化』よ。映研部で弱いのはやはりお前か『道化』。しかも群を抜いてな。山本は人に教えを成すのは無理か。」ヒュンヒュン、カキッカキッン、トランプを投げたが普通に弾かれた。だがそれは計算の内、フゥン、ガキン、トランプを弾く時の隙に水平蹴りをする。『一』は勢いで側転して難なく受け流す。その隙に僕は勢いを使い素早く起き上がりトランプを構える。「ふっふん、『道化』さっきより立ち上がり方は良いな。だが敵の隙にしか攻撃出来ないのか。お前の動きは自分の力を使い過ぎるまるで素人だそれでも『道化』か？そんなんでは肝心な所で体力が切れるぞ。」「ゴチャゴチャうるさいっ　しかも『道化』でもないっ」ヒュンヒュン、トランプを左右交互に降り下ろす。『一』のガードは固い。フゥンフゥン、ブンブン、トランプ二枚を同じ方向に袈裟斬りするさらにその勢いで回転して袈裟斬りする。少しガードが下がった。勢いを殺さず地面を蹴り勢いを増す。回転浴びせ蹴り、『一』は僕の足を木刀で受けると弾き返した。「さっきより動きが良くなった。驚異的スピードで強くなる。まるで戦場の道化の如し」僕は弾かれた、また止められたが木刀に当たった瞬間体を回転させもう一方の足で『一』の腹を蹴り飛ばす。だが、『一』は木刀から片手を離しその手で僕の足を止める。「ふぅぅん、はっ」『一』は僕の足を掴みそのまま真上に投げて下で抜刀の構えをしている。空中ではほとんど身動きが出来ない、恐らく落ちてくる僕に居合い斬りを喰らわせこれで終らす気だ。ブゥン、『一』はピッタリのタイミングで木刀を振ったが僕はギリギリの所で空中で身をよじり避けた。クルッ、ブゥン、バコッ、「ぐはっ」ザッザン、身をよじり一回は避けたが『一』はそのまま一回転してもう一度木刀を振

った。それは予め僕が避けるのを予測した攻撃だった。『一』は僕に痛がる事さえも許さず地面に倒れる僕を蹴り上げる。一回転しその勢いで立ち上がり前を見る。「遅い。」後ろから声がしたと思ったら全身に強い衝撃が走る。『一』は僕の後ろを取ると木刀で首筋を殴打した。「どうだ。気分最悪だろ。狙って脳が揺れるよう殴ったからな。しかもまだ分からんかも知らんが視力も一時的に奪ったからな。」地面に倒れると背後からそう言われた。「うっ、おっおぇぇ、くっ」確かに気分は最悪、自分が地面に倒れてる事すら分からなくなってくる。前を向くと視点がぼやけだんだん光すら感じなくなった。だが敵はすぐそこにいる。ゆっくり、頭を刺激しないよう耳に神経を集中して体を起こし構える。「耳は使えるだろ。だが耳で敵の動きを捉えるっていうのは相当な訓練や元々見えないの人以外はそう簡単に出来ないんだよ。」声のする方向に向く、がすぐそれは変わり、『一』の動きを全く捉えられない。『一』は全然動きを捉えられない僕を弄ぶかのように動いては僕でも分かるよう弱く殴ってきた。僕はそれを必死に受けては見えない敵を攻撃した。だが、『一』の攻撃を受けてばっかりの僕もだんだん敵が攻撃してどっちに逃げるか分かってきた。「あと三回だっあと三回で読んでみせる。」一回、攻撃がきた所とは少し横を攻撃してが空振り。二回目今度はもっと前を攻撃する。しかし、また外れ。三回目、タイミングを合わせ攻撃を返す。すると、大きなダメージこそは喰らわせなかったが、当てる事が出来た。「ふっん、戦いの中で進化するとはさすが舞夢の弟、天性の才を持つかっ　だが、まだまだだっ。行くぞ『道化』」タッタッタッ、正面から走ってこちらに近づく足音、僕はそこに向かいトランプを投げる。それは『一』によって音を立て弾かれるだがその音ごと『一』を殴る。それすら見切られ僕の拳は空を切る。「残念だっ　『道化』！！！」拳を避けた『一』は跳び上がり上から容赦の無い突きを落とす。グズッ　拳が空を切った後自然と体が動き『一』の木刀を頭の上で片手で受け止めた。だが、ボスッ、ドッドドズァーズグァン、　「グブフッ」　「『

道化』、貴様はまだまだ経験が浅い。好敵手になっていたかもしれないなっ　だが終わりだっ」木刀を大きく振り上げた『一』は僕の足に向け無情にも降り下ろされる。キーンコーンカーンコーン…これにて第６９回球技大会を終了します。ピタッ、木刀は僕の足に軽く触れる所で止められた…「俺も甘いなっ、だが良い弟子になりそうだっ」…もう一度繰り返します。全校生徒は校庭に集まり、生き残った生徒は前に並んで下さい。

嘩亞怒遊び騙（後書き）

最後までありがとう　今回はボール当てが上手く区切れず一話潰した。　サバイバルゲームできなかった。すまん

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2479e/

学校非公認・サバイバル部、時々、映研部

2010年10月10日03時18分発行